

昭和二十三年九月末日（？）九州の佐世保へ上陸。二日程して三百円を支給され、約三日間程して故郷の自宅へ復員しました。

結婚は昭和二十四年。子は男ばかり三人、その中次男は航空自衛官二尉の現役でお勤め中。孫、曾孫と皆元気で暮らしています。

私の戦後の略歴は

岩松漁業協同組合監事、理事。

津島町自衛隊父兄会長。

愛媛県自衛隊父兄会理事。

津島町同和对策委員。

津島町老人クラブ理事。

津島町文化財保護審議会委員。

等で現在は老人会等で余生を楽しんでいる。

今日の祖国日本の繁栄の陰に尊い犠牲が多にあったことは忘れてはならない。特に次代を担う若い世代は知って貰いたいと思う。私の方へもある時、小学校五年生が五人来てくれました。戦争

の話をと約一時間熱心に聞き入っていました。もっともつと沢山の青少年が戦争中の労苦に深い関心と興味を持ってほしいと切に望みます。

太平洋戦争は日本は負けた、東南アジアの諸国は独立して植民地から自立した、お互いにアジアの諸国と手を取り合っつていつまでも仲良くしましょう。

最後に先の大戦において護国の鬼となった戦没戦友の御霊に対して御冥福をお祈り申し上げます。

スマトラ

油田地区の警備

千葉県 山内 信次

昭和十五（一九四〇）年三月、千葉県立市川中学を卒業、家業であった土木建築石材業の手伝いをした。父母共に健在で兄弟は男二人、女二人の

四人兄弟だった。

満州事変から始まった戦争が支那全体に拡大し、いつ終了するのか誰も予想がつかなかった。

それと呼応するようにヨーロッパにも戦雲がたちこめ、いつどこの火薬庫に火がついてもおかしくない現状だった。

昭和十六年十二月八日、太平洋、大東亜戦争が開戦、準戦時色から戦時色に塗りかえられていった。

昭和十八年四月、現役兵として東部第七部隊第一中隊に入隊した。そこで初年兵教育を受ける。

同年九月、近衛の一個連隊が甲府の第六十三部隊に移籍した。甲府では外地への出発準備や一部編成替えやら下士官の交替やらで、雑事に追われて忙しい毎日を過ごした。

二〜三カ月も過ぎた頃、夏服が支給され、東部第六十三部隊は部隊をあげスマトラへ移転し、その警備にあたるのだと噂が流れた。夏服が支給されたのだから南方行きは間違いないと思ってい

たら、どんぴしゃスマトラ行きだった。

昭和十八年九月一日、大阪港を発ち、二千人の部隊は船団を組み、マニラ経由スマトラへ向かった。バシー海峡を航行中、アメリカ海軍の潜水艦隊に襲われ、輸送船は逃げまどうばかりだった。

真夜中のことでもあり、魚雷を避けるのが精いっぱい、数隻の輸送船は魚雷の餌食になった。

われわれ兵士には分からなかったが避難所や避難港が指定されていたのだろう。数日後サイゴン（いまのホーチミン港）に沈没をまぬかれた輸送船がぼつぼつ集まってきた。応急修理の後、再び船団を再編成しスマトラ島のメダンに向かった。

スマトラ島は第一次の作戦が終了し、警備警戒の時期に入ったので治安も比較的良好、軽微な軍務など現地からの志願兵に任せるとしていた。いざという時、日本軍の戦力になると思いが、むずかしい面もあった。

復員してからいろいろ本を読んだが、蘭領イン

ドネシアなど比較的治安がよかったのではないかと思う。

一週間ごとに食糧の配給があるし、現地人の反乱もない。時たま石油地帯への爆撃もあったが、将来の使用も考えてのことと思うが、徹底的に基地を破壊し尽くすという従来の戦術とは異なっていた。対空射撃、対戦車攻撃の演習も盛んに行われた。

警備中のある日、中隊長と人事係准尉に呼ばれ、幹部候補生を志願するようにすすめられた。戦線が拡大する一方、下級将校、下士官が不足している所以この際資格のある者は一人でも多く志願してほしいとのことだった。二、三人の同年兵とも相談し幹部候補生を志願することにした。幹部候補生には将校を志願する甲種幹部候補生と下士官を志願する乙種幹部候補生があり、学科、品性、健康等の試験があった。それに加うるに中隊毎に一定の合格枠が設けられていた。

東部第七部隊は九中隊編成で、第十中隊はスマトラで増設された。軍隊でも新設や増設の中隊は何かにつけ不利益を喰うもので、第十中隊も例外ではなかった。将校一人の枠が削られてしまった。自分より学科も兵科も下の人間が、その枠の關係で甲種に選抜されたのは心よいものでない。中隊毎に行われた乙種教育も無事終了し、伍長に任官した。

スマトラの連隊本部のあるコラジャから、昭和二十年九月、パレンバン第九十四兵站警備隊に転属になった。文字通り血の一滴でもある石油の生産を確保するためである。パレンバンは石油生産地の中心地にあり、米・英・オランダはこの基地の奪回をねらっていた。

昭和二十年になり戦況が毎日不利になるのが肌で感じられた。パレンバン防護のため一時バンガ島にも分屯したこともあった。

戦況が日のたつにつれ不利になり、現地で採用

した補助兵が櫛の歯がぬけるようにいなくなるのには弱った。しかも武器を携行しての脱走である。まだ軍隊としての反乱でなく幸せであった。一方インドネシア独立の動きも盛んになり、わが軍も警戒を深めていた。

八月十五日の大詔は、数日過ぎてからバンガ島で聞いた。日本軍はイギリス軍に投降し、後は、その支配下に入ることが条件である。蘭領東インドと言う以上オランダ軍がきて終戦処理をすべきだと思ったが、すべてイギリス軍が代行した。イギリス軍の戦犯追求は厳しいと聞いたがそれほどでもなかった。しかし抑留中の待遇・食事・労働は厳しかった。

昭和二十一年九月、広島の大竹港に復員、父と共に山内工業株式会社を設立した。

現在子供達にも恵まれ平和な生活を過ごしている。

十数年前、家内とジャワ、スマトラ旅行に参加

したが、当時の田園風景は面影を残していたが、大都市は大きく変化し、昔とは様変わりだった。ときどき写真を取り出し、昔と今を較べて振り返って見ている。

南方石油部隊

(ジャワ・チエプー製油所)

新人社員としての体験

大分県 足穂 正人

大東亜戦争は「石油に始まり、石油に終わった」と言われています。その、きびしい体験は、第一線の兵士以上の重い任務を背負った私でありました。

当時、私は満州国関東州大連の甘井子に在った「満州石油株式会社」の大連工場勤務でありました。この工場は、アメリカから三流品の石油を輸入して、軍や民間への石油類を精製して、供給し